

# 「拡張家族」多様な住人集い



家主の宮崎さん(右から2人目)から修学館の歴史を聞く住人たち。共有のリビングは他にもあり、食事や話し合い、仕事などに活用されている



大学生の部屋で遊ぶ2歳の女の子。住人たちが育児に関わっている

京都市左京区下鴨で、半世紀近く学生寮だった建物が今秋、装いも新たに特色あるシェアハウスに生まれ変わった。住人の年齢や職業、背景はさまざま。「拡張家族」という一風変わったコンセプトの下、ともに生活し、対話を重ねることで、人間関係や固定観念を問い直す。そんな小さな「社会実験」の場でもある。

(堤冬樹)

柔らかな陽光が差すリビングで男女が談笑し、廊下では子ども元気の音が響く。閑静な住宅街に立地する木造2階建ての「京都下鴨修学館」。幅広い年齢層の約40人が暮らし、会社員や学生、カメラマンや職

りなどに携わる傍ら、社会規範に縛られがちな従来の家族像に疑問を抱き、より多様で自由な在り方を追い求めてきた。大切にしているのは「拡張家族」というコンセプト。「まず相手を家族だと思ってみることで、いろんな問いを生み出す小さな社会実験」と説明する。

## 左京に学生寮改装のシェアハウス



シェアハウスに生まれ変わった「京都下鴨修学館」の住人ら。世代や職業などはさまざま(京都市左京区下鴨)＝撮影・松村和彦

## 人間関係問い直す「社会実験」



共有スペースに置かれた「どんぶりバンク」。感謝の気持ちを表したい時などにお金を入れる

し、初めてお箸を使った時は食卓で歓声が上がった。夫が仕事で忙しい時など一人で育児に悩むこともあったという母親は「ここには多くの人が娘の成長を見守ってくれてうれしい。いろんな人がいて、いろんな生き方の選択肢があることを親として伝えたい」と思いを込める。

### 対話を重視

山倉さんを含め、居住者の多くは複数の生活拠点がある。修学館と東京の実家を行き来するライター尾島可奈子さん(34)は「世間はまだ評価軸のない実験的な取り組みに興味があった。結婚や出産以外で『家族』ができるのも面白い」と話す。

さまざまな出会いに刺激や気付きを得るだけでなく、実家とは別の居

場所ができたことで、当たり前だと思っていた実の家族との関係性もより大事に考えるようになったという。

もともと建物は1970年に女子学生寮として産声を上げた。後に留学生が多く入るなど時代とともに学生を支えたが、2018年に閉鎖。父親の後を継いだ家主で美術家の宮崎又行さん(71)は「壊すのは簡単だけど、せつかくの場所を次世代に残したかった」。

その前年、拡張家族のコンセプトを掲げ、東京などでシェアハウスを手がける一般社団法人「Cifft(シフト)」が京都で拠点を探していることを知る。東京へ見学に行くなど、多世代の住人たちが技能や知恵を共有し、子育てや仕事に励んでいた。

「最初は半信半疑だったけど、孤立しがちな現代に合っていると思った」と宮崎さん。Cifftや不動産業フラットエー・ジェンシー(北区)などと寮の再生に踏み出し、3年がかりで完成を迎えた。

内部は昔ながらの風合いを生かしつつ、部屋数を減らし、その分、食事や談話、仕事ができる共有スペースを複数設けた。互いのコミュニケーションを何より大切にすためだ。フラット社の橋本浩和プロパティマネジメント部長も「他のシェアハウスと違って対話の機会がとにかく多い」と指摘する。定期的な「ハウス会議」や会員制交流サイト(SNS)の活用で、ごみ出しや荷物の受け取りといった細かなルールづくりも自主的に進められている。

### 感謝が循環

修学館では「循環」もキーワードの一つだ。例えば、リビングにある「どんぶりバンク」という容器。誰かに料理や掃除をしてもらった時などにお金を入れる。金額は自由で、主に食材や日用品の購入に充てられる。お金自体よりも、感謝の気持ちがある。家主の宮崎さんは「明かりがともり、人が感じられてうれしい。ここができて僕もワクワクしている」と笑みを浮かべ、山倉さんも「地域に開かれた存在でありたい。この場をきっかけに、いろんな人のつながりや新しいものが生まれれば」と前を見据える。

下鴨の地で学生寮として出発し、ちょうど半世紀。多様な背景を抱える住人たちによって、新たな物語が紡がれ始めた。



個室が並ぶ2階。複数人でシェアしている部屋が多い